

第2章

子どもの育ち

第1節 関係発達保育論を基本とする

保育所保育指針の第2章には、子どもの発達過程が示されています。岩屋保育園は、指針が示す発達過程を基本的な発達の捉えかたとして参照しますが、子どもが周囲の人や周囲の事物との多様な関わりの中で育っていくことを思うと、能力発達に傾斜した指針の示す発達過程だけでは不十分です。

子どもは家庭と保育園の両方に生活の場をもちますから、家庭での保護者と子どもの関わりは、保育園での子どもの生活に色濃く反映しますし、保護者から見れば、わが子が保育園でどのように保育者やクラスの仲間と過ごしているのか、その関わりが知りたいところでしょう。このように、家庭を基盤としながらも、保育園にも生活の場をもつ子どもの育ちは、多様な関係性の網の目の上で変容してゆく過程ですから、子どもと生活を共にする保護者や保育者もまた、子どもとともに育つものであるという立場に立って、子どもの育ちを関係論的に捉える必要があります。

第2節 保育室と育ちの区分

岩屋保育園の本館には、3歳以上の子どもたちのために3室、2歳児のために2室が用意され、ホールなども設備しています。別棟のくすのきの家は4ヶ月から2歳6ヶ月頃までの子どもたちのために、けやきの家はおよそ2歳から3歳までの子どもたちのための保育環境として準備しました。このように保育室を用意するのは、子どもたちの育ちを考慮しているからですが、以下に、それぞれの保育環境での子どもたちの育ちを概観します。

1. くすのきの家の子どもたちの育ち

くすのきの家の2階には4ヶ月からおよそ1歳6ヶ月の子どもたちにふさわしい保育的環境が用意されています。この時期の子どもの育ちは、なにより直立二足歩行と言葉の獲得が中心です。ここではまず歩行に向けての発育を軸に、身体とその機能の育ちを確認することができます。また、有意味語の出現は、認知面の子どもの育ちの確認になりますが、そこに子どもが体を動かすよろこび、気持ちを音声に表現するよろこび、そしてそのよろこびを周囲の人に共感してもらえるよろこびが充足しているかどうか、重要であることは言うまでもありません。

くすのきの家の1階には、およそ1歳6ヶ月から2歳6ヶ月の子どもたちにふさわしい保育的環境が用意されています。この時期の子どもの育ちは、自分の思いや願いを言葉でうまく表現できるかどうかにかかっています。それはまた、他児との関わりが始まりでもあり、保育者を交えた日々の営みの中で、ゆるやかに人と関わることを学んでゆきます。

2. けやきの家の子どもたちの育ち

けやきの家の1階と庭には、およそ2歳から3歳までの子どもたちにふさわしい保育環境が用意されています。この時期の子どもの育ちは、戸外活動を十分楽しむことができるかどうか、身体および身体機能の育ちの目安になります。そのために、くすのきの家よりも広く、多様で、しかも安全に配慮した庭が用意されています。

平坦ではない地面、段差、建物への出入り、土や草木、水などに、スコップや器などの道具も加えた保育的環境を利用して、保育者を交え、思う存分友だちと遊ぶことが、身体機能が戸外活動によって充足されるこの時期の子どもたちには何より大切です。そして保育者は、そのような具体的な活動において一人ひとりの子どもの育ちを、心身両面において感じ取ることによって、一人ひとりの子どもの“いま・ここ”を認め支えつつ、次の段階を子どもに求める日々が展開します。

3. 本館2歳児クラスの子どもの育ち

2歳児のクラスには、2歳になったばかりの3月生まれの子どもの1年と、すぐに3歳になる4月生まれの子どもの1年というように、およそ2歳から4歳までの子どもの育ちを見通した保育的環境が準備されます。子どもたちの月齢差はそれでも1年未満ですから、必ずしも4月のはじめから年度末までいつも2歳から4歳を想定しているわけではありませんが、一人ひとりの子どもの育ちを大切にするために、保育者は子どもの育ちを、ゆとりをもって考えています。

この時期の子どもたちは、〈大人：子ども〉関係から〈子ども：子ども〉関係へ自分の世界を広げてゆきます。けやきの家やくすのきの家でも〈子ども：子ども〉関係は多く見られるのですが、保育者の関わりが異なります。およそ3歳までの子どもたちは、保育者をかたわらに、保育者を交えて遊ぼうとしますが、3歳を過ぎると、“何かあったら呼ぶから、先生はあっちでみてて”というように、保育者を心のよりどころとしながらも、“僕らで遊ぶ、私たちが遊ぶ”ようになります。そのような子どもどうしの関わりからやがて、自分の中のもうひとりの自分と他者を比べ、自分を知るようになってゆきます。それは周囲の人から自分が映し返されることでもあるのですが、ただ映し返されるだけではなく、自分の中で自分で比べるという作業、すなわちもうひとりの自分との対話がより深まってゆくこととなります。

4. 本館3歳以上児クラスの子どもの育ち

3歳から就学までを想定した保育的環境が、室内外だけでなく鎮守の森や地域社会も含めて準備される3つの3歳以上児クラスは、それぞれ約40名の子どもたちによって構成されます。3名の保育者も加わり、その関係の網の目は、多様な縦糸、横糸によって織りなされます。

このように多年齢にまたがって子どもが生活するクラスでは、大きい子どもが小さい子の面倒を見てあげる、小さい子どもが大きい子にあこがれて育つなどといわれます。たし

かにそのような場面も少なからず見受けられますが、岩屋保育園の場合は、遊びや活動に合わせて、子どもたちが自分たちで仲間を形成していることが特徴的です。ですから、たいていは年齢の近い子どもたちが集まり、思い思いに遊びこんでいますが、大きい子が小さい子を仲間に入れたり、手助けしたりする場合も、それを大きい子どもからの一方的な援助、あるいは小さい子の依存とみるのではなく、そこに仲間関係が成立し、たとえば小さい子から頼られて手助けする大きい子も、頼られることで自分を発揮していると考えれば、大きい子もまた小さい子によって自分が活かされるよろこびを味わうことがわかります。

興味や関心が掻き立てられて遊びや活動が始まりますが、そこに集まる子どもたちの関係は、必ずしも“一緒に楽しい”ことを初めから理解しているわけではなく、〈取る：取られる〉というような負の関係から始まり、やがてはそれを超えて仲間になるような場合も少なくありません。気心の知れたどうしであればいいのですが、それでも思いと思いは交錯し、ぶつかり合い、それをなんとか調整して遊びは展開します。3歳以上といえども、そこに保育者の手助けは必要となります。そのような関わりをとおして子どもたちはやがて、“私は私、でも私はみんなの中の私”という、岩屋保育園の中心的な目標を体得してゆきます。

人が人とともに生きる困難さから人が生きる意味を学びとってゆくことが、この時期の子どもたちの心の育ちの大切なところ です。

では、“私は私、でも私はみんなの中の私”という両義的な関係を通して、子どもたちがわが身に具えるものとはなんのでしょうか。

その一つは、自分で自分の気持ちを立て直すことです。3歳以上児のクラスでは、思い通りにいかないこともしばしばです。しかも思い通りにいかないことを乗り越えて子どもは育つと保育者は考えていますから、容易ではありません。その厳しさも伴ったクラスの中で過ごすためには、周囲の人に助けられながらも自分で自分の気持ちを立て直すことを学び取ってゆかなければなりません。それはなかなか困難なことではありますが、その経験によって自分もまたいつか、他者を支援するようになり、やがては協同して何かに取り組むことの楽しさを知るようになります。協同する場では、他者の思いや気持ちも受け入れることが求められもして自分の思い通りにならないこともしばしばですが、それがお互いさまだということに、やがては気づいてゆきます。このようにして子どもたちは、ほどほどの人との付き合いを身に引き受けてゆきます。

5. 育ちのまとめと具体的な確認作業

(育ちのまとめ)

- 第1期 直立二足歩行と言葉を獲得する
- 第2期 周囲の人との関わりから、もうひとりの自分と出会う
- 第3期 〈大人：子ども〉関係から、〈子ども：子ども〉関係へ自分の世界を開く
- 第4期 他者への支援がもたらすよろこびを知る
- 第5期 協同するよろこびを知る

(具体的な確認作業)

- (1) 医師による定期健診
- (2) 36ヶ月までの育ちのチェックリスト
- (3) 身体測定と体力測定
- (4) 生活習慣に関する97項目のチェックリスト
- (5) エピソード記述とエピソード記述を資料とするカンファレンス